

# 伝統を礎に 新たな農業を拓く



五月祭で弥生キャンパスに展示されたトラクタ  
1969年東京大学卒業アルバムより

## 撮

影当時、現在は生態調和農学機構に改組された田無の農場や二宮果樹園には、大型農業機械が数多く輸入され、機械化農業の先端を走っていました。この年は分かりませんが、小型バス並みの大きさの西ドイツ製コンバインを、深夜に田無から新宿・市ヶ谷を通って、自走で弥生キャンパスまで届けたという逸話が残っています。

子供が乗っているトラクタは、二宮果樹園のドイツD30型です。ドイツ社は、4サイクルガソリンエンジンを事実上発明したニコラウスオットーによって創立されていますが、多くのトラクタのようにディーゼルエンジンで動きます。ちなみに、ルドルフディーゼルが発明したエンジンの燃料は落花生油、つまり、バイオ燃料が使われていたのです。なお、ドイツトラクタは、元々は農業機械メーカーであったランボルギーニ社のトラクタとして今でも流通しています。

また、左側に正面を向けているのはキセキTB20型で、この原型はボルシエ社製トラクタにあります。ボルシエと聞くとスポーツカーをイメージするでしょうが、創始者のフェルナンドボルシエは、技術を磨くスポーツカー、誰もが持てる大衆車、民を豊かにする働く車であるトラクタ作りを自動車設計の核と考えていたといわれ、大衆車のフォルクスワーゲンビートルも彼の設計です。

トラクタとは牛馬に替わる車ですが、エンブレムには、ランボルギーニが牛、ボルシエには実った小麦の黄金色の地に馬が描かれています。当時の卒業生は安田講堂事件を実体験した世代であり、トラクタ展示企画にはエンブレムのような日本農業発展への情熱が込められていたと思われます。当時の期待には応えられていない現状を成長産業へと変革しうるか否かの岐路に立つ今、その道標と成りうるように生態調和農学機構のキャンパス整備を進めることが現世代の使命であることは自明でしょう。

附属生態調和農学機構 米川智司准教授